

●テーマ：社会で生きる土台をつくる —初年次教育からのアプローチ—

I 背景

近年、日本の社会情勢において、少子高齢化、グローバル化や情報化等、状況はめまぐるしく変化し続けており、大学の役割としては、そういった社会からの要請に応えるべく、教学政策、研究活動の推進等に取り組んでいくことが求められている。このような現状を踏まえ、本グループでは人材育成の観点から「社会で生きる土台をつくる—初年次教育からのアプローチ—」をテーマとし、議論を進めた。

II 大学の役割

研修中のグループでの議論にて、各自の大学の特色を話あっていくうちに、地域や規模、学部構成等の違いからそれぞれが異なる環境であることがわかり、「各大学の特徴、強みを生かした人材育成」を大学の役割とし、それに焦点を合わせた議論を行った。議論の大きな軸として出た結論としては、「現在の社会が求める人材像について「主体的な学生を育成する」」という意見が各大学の共通点となった。

III 現状と課題

大学全入時代に突入し「とりあえず」入学し大学生としての意識がない学生が多く、何のために大学に通っているのかという意識が薄いため、「(1) 目的意識を形成させる必要がある。また、高校と大学での講義の違いがわからず「自ら考える」という能動的な学習スタイルを身に着けることができず戸惑う学生が多く、情報収集の必要性や自分の意見を他人に伝えることの大切さを身に付ける (2) 「学びの転換」の必要がある。また、大学で今、学んでいることが社会にどう活かしているのかわからず、「(3) 大学での学びと社会のつながり」を意識することができずにいる。そのため初年次から各講義が社会で生きていくうえでどう活かしているのかを知ることで自身の学びの意義を理解し、大学生活を有意義に送ることのできるのではないかと考える。

そのため、初年次から学生が規則正しい生活を送り、大学内の学習・施設の利用、部活動やプロジェクト等から自分自身の目的を見つけて自立して行動できるようにする必要がある。また、大学で行ったことが社会にどうつながるのか学生に意識させる仕組みを作ること、将来を考えた有意義な大学生活を送れるようになり、社会に出た際に、大学で得た知識と主体性を発揮することができるよう支援していくことが求められている。

IV 改善に必要な方針

(1) 目的意識の形成

何のために大学に行くのかを考え大学4年間を通じてやりたいことを見つける・考える・気づくことができるよう「気づきを促す仕組み」をつくり、自分自身や他者と向き合う機会をつくる。

(2) 学びの転換（高校生から大学生（大人）へ。）

高校生までの一方向の学習スタイルからの転換を図り、自らで情報収集（インプット）を行い自分の考えや意見を発信（アウトプット）していく能動的な力を養う。

(3) 大学での学びと社会のつながり

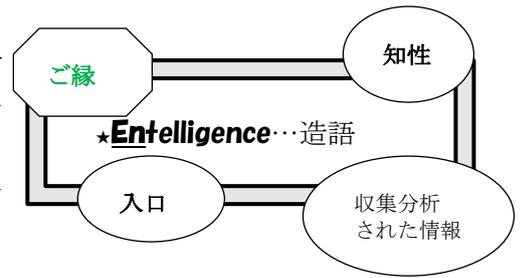
大学で学んだ結果が社会にどう役立っていくのかを考える教育を行い、インターンシップや民間企業・自治体とのコラボ、OB・OG との交流、英語やパソコンスキルなど実務スキルを磨くことで、社会を意識していくこと。

上記のことから、初年次から学ぶことへの目的意識や大学と社会とのつながり、キャリア形成意識をもつことができれば4年間の学びの土台が形成され、3・4年次までに正課外を通じた経験、学習による自己の形成を図ることができ、専門的素養があり主体的に行動できる人材の育成を行うことができるのではないかと考えた。

V 具体的な提案 (ICT)

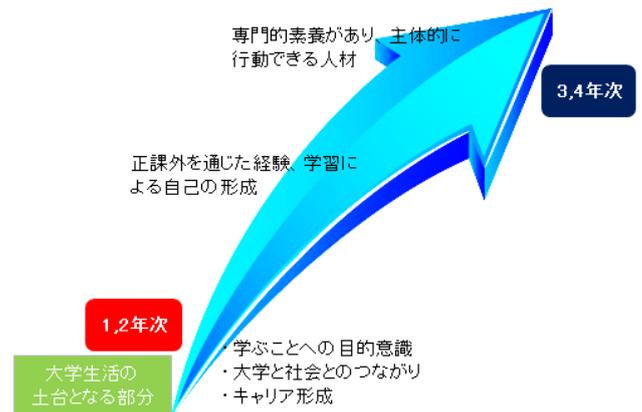
ICT の活用はあくまでも「手段」であり、大学では教職員が一社会人として、学生を「大人」として接することで大学生としての自覚を持たせることが前提となる。

その中で、学生の学びを支援するポートフォリオ「★Entelligence」を提案する。



①学生自身が自分自身の履修過程や提出レポート、定期試験のフィードバック等の具体的な学修過程について管理でき、自分自身を振り返ることができるシステムにより、就職活動時の ES 作成にも活用できる。

②通販サイト Amazon.com の「ターゲティング広告」のように自分自身と同じような目的、傾向や経験をしている人とのマッチングを行えることで、自分と同じプロセスをたどり成功した先輩の実績についての情報を得ることができるなど、自分以外の人の目標や学びを共有することで、自分とは異なる考えに触れるきっかけを提供し、知識・視野の広がり支援する。



ex) 「あなたと同じ目標を持った人は XXX の講義を受講しています。」

「XX へ留学に行った人は国際センターの XXX の研修を活用しました。」

③先輩などのレポートをシェアできたり、社会人になった先輩がどのような科目を履修していたか、社会に出て役に立った専門科目を知ることができるシステムをつくることで、社会を意識した学生生活を送ることができるように支援する卒業生の活動記録からフィードバックをしてもらう仕組みづくり。

上記のようなポートフォリオの機能とターゲティング広告の機能、教務事務的情報を合わせたシステムをつくることは、各独立したシステムを相互に運用できるようにすれば可能であると考えられる。

ポートフォリオの運営については、まず授業で実際に利用して学生に利用する習慣付けをさせる必要がある。そのために、情報センター部門が教職員に操作説明会を実施し、それ以外にもいつでも確認できるように操作マニュアルや動画の作成を行うなど、フォロー体制を整える必要がある。教職員が随時ポートフォリオに必要な情報発信を行い、授業で利用していく中で要望等があれば随時改善していくなど、大学の全教職員の中でポートフォリオの目的を共有することが求められる。

VI 今後の大学職員に求められること

今回の研修に参加し、学生に対して一社会人として接し、「大学職員として教育の一部を担っている」という意識を強く持つ必要があると感じた。学びの場としての教育の情報提供、教育の基盤づくりのための情報収集、事務職員だからこそできる学生へのマナーやモラル指導、以上のことを積極的に行うことが鍵となる。また、教員が持っている専門的な情報と学生の知的好奇心を結びつけ、それを最終的に社会貢献に繋げるための「コーディネーター」の役割を担い、働く姿勢を通じて学生の手本となるよう努めることが求められてくると思った。